様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 24 日現在

機関番号：３２６０５
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2010
課題番号：19330111
研究課題名（和文）
現代社会における対人援助に関する社会学的総合研究
研究課題名（英文）
Sociology of Social Support in Contemporary Society
研究代表者：
佐藤　恵（Sato Kei）
桜美林大学・法学・政治学系・准教授
研究者番号：90365057

研究成果の概要（和文）：
本研究は、脱専門化が進む支援の現代的位相において、単に「語り」の重視や「受け手」の尊重、当事者性の優越といった点に留まらない社会学的な支援の分析可能性を目指すものである。具体的には主として、セルフヘルプ・グループでの語りの分析を通して、それが現実の異化効果を持っているのみならず、「聴き手」との関係の再編や「聴き手」の存在の必要性が重要となってくることを分析した。さらには障害者への経験的調査において、その生を有意味なものとする関係の重要性が分析された。
研究成果の概要（英文）：
This research project has been trying to find out the possibility of the “new” way of social support.
In other word, we have tried to avoid the meaningless dichotomy, namely, between the special knowledge and fork knowledge, dominant story and narrative, and so on.
Through them, mainly we have shown the important meaning of narrative and it’s listener for the people who suffer from the ambiguity of identity. Moreover, we have also shown the meaning of life for handicapped people beyond the dichotomy.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 4,200,000 | 1,260,000 | 5,460,000 |
| 2008 年度 | 3,800,000 | 1,140,000 | 4,940,000 |
| 2009 年度 | 3,800,000 | 1,140,000 | 4,940,000 |
| 2010 年度 | 2,800,000 | 840,000 | 3,640,000 |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 14,600,000 | 4,380,000 | 18,980,000 |

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：ケア、セルフヘルプ・グループ、心理主義、被害者化

## １．研究開始当初の背景

当事者運動の成果、政策的提言、学問的成果ないしは輸入により、2000 年代の対人援助（とその受け手）はそれ以前と比して、少なくともその先駆的な形態においては大きな転換があったように思われる。

その第一のものが対人援助の市場化とそれに平行した供給の増大である。これにより少なくとも対人援助が学問的・政策的課題としてのみならず日常的にも課題となるスキームが登場した。

第二のものが脱専門化である。一方では専門家がその持っている「知」、ないしはエージェントとして振る舞わざるを得ない存在の位置から、対人援助の脱専門化が志向された。またもう一方で、対人援助の「効果」と

しても旧来型の専門知の有効性が疑問に付された。

第三のものが、当事者性の導入である。これはもちろん、運動論としては以前から存在しており、議論されてきたが、広く一般の学問知として当事者知見を導入すること、ないしは当事者性を標榜することはこの時期から登場してきたことである。

このように、このプログラムの開始背景は、広く従来の対人援助論、福祉論が問題としてきたことが乗り越えられつつあるかのように見える趨勢の中で登場する問題を分析することにある。

すなわち上記した三つの事柄に関連づけていくならば、援助の一般化による問題の潜伏、脱専門化による専門家・専門知という「仮想敵」の不在、当事者性の導入による学問知のあり方の変容といった事柄である。

２．研究の目的

本研究は、上述したように、市場化・脱専門化が進みつつある対人援助が抱える課題を社会学的に考察することを目的とする。

介護の制度化・市場化が進み、最低限一定程度の介護が保証されることは、それ自体としては、諸運動の成果が相まっての＜善＞なるものととらえることが出来るだろう。また支援の脱専門化が進み、専門家主導の下では必ずしも十分でなかった当事者の声、ニーズがくみ取られるようになったことも、また＜善＞として捉えることが出来るだろう。

だが、本研究はそれらの＜前進＞を無条件のものとして捉えるものではない。むしろかえってそれによって問題が引き起こされる、あるいはこぼれ落ちる課題を見据え、それを目的とした。

まず第一には、制度的な介護・支援がある種の隙間を作り、またある種の問題を引き起ことである。それはまず制度的介入がもたらす画一性の問題であり、支援がニーズを捉えてしまうことが問題と見える錯視の問題である。

第二には、脱専門化された場・空間が必ずしも真空のものではなく、支配的なフレーム同士のせめぎ合いがかえってせり出してくるということである。それは特に個々人が経験のみならずその存在を織り上げていく場における「語り」の承認/不承認といった形で立ち現れてくるものである。

これらを通して、第三に浮かび上がってくるのが、当事者性という問いである。この 10 年の（そして多くの場合・時代）の支援実践の振れ幅としてある脱専門化、脱施設化、脱アイデンティティ…. 等々の事柄に対して、単なる記述でもなく、距離化された分析でもない社会学の確立が目指された。

３．研究の方法

本研究では、上記した目的に沿うべく、介護の制度化・市場化という課題に関しては、「感情労働と介護」、援助の脱専門化という課題については「セルフヘルプ・グループと自己」という調査グループを、全メンバーが参加する形で作り上げた。

「感情労働と介護」においては、支援の制度化がなされることによってかえって制度の隙間が生じてしまうこと、さらには支援が心へと傾斜してしまうことへの違和が生じることをリサーチ・クエスチョンとしながらいくつかの介助施設への質的調査を試みた。

「セルフヘルプ・グループと自己」では、脱専門化された語りが、かえって何が支配的な語りなのかをめぐるコンフリクトを起こすこと、語りという行為が実は特異なものであることなどをリサーチ・クエスチョンにしながらいくつかのセルフヘルプ・グループに質的調査を試みた。

また、支援と語りを分析するために補完的に作られたグループである「心理主義化と対人援助」では、専門性の下に支援が制度化されることで、原因の心理モデルへの退行がなされることを指摘した。また、「犯罪被害者支援」では、語ることがそもそも困難な対象への支援のありかたと、聴くことがもつ効能を分析することが試みられた。

４．研究成果

本研究の主な成果は、メンバーが執筆した『＜支援＞の社会学』並びにそれぞれの単著がある。詳細はそれらを参照されたい。

だがあえて全体を通して、主となる成果の要点は三つぐらいにまとめられるだろう。

第一には、支援の制度化は必ず隙間を生み出すが、他方でそれを埋めることを試み続ける実践が重要であるということである。これはそれ自体が必ずしもオリジナルな主張ではないかもしれないが、この社会への予見的な側面としては、「心」をめぐるそれを明らかにした点、あるいは支援の分配を見通す際に重要だと考える。

第二に、「語る」という実践は必ずドミナントなフレームをめぐる争いとなりえ、また「聴き手」という承認を必要とするという点である。つまり、支援実践にとって、必ずしも専門性ー脱専門性という対立軸が決定的なのではなく、承認という機制が重要なのである。

第三には当事者性との距離の取り方であり、本研究グループが志向する支援の社会学のメチエである。近年の学問と当事者、実践への参与、という課題に対して、当事者主義に陥らない道を示した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17　件）
1）荒井浩道「認知症ケアに求められる家族支援の視点」中央法規出版『おはよう 21』22(4), 28-29. 査読なし、2011 年
2）崎山治男「「心」を求める社会」『社会学評論』61-4 号 pp840-853,査読有、2011 年
3）水津嘉克「自死遺児の語りにおける、物語り変容の可能性」『東京学芸大学紀要』.人文社会学系Ⅱ62 号 157-165、査読なし　2011 年
4）三井さよ「調査結果における公表の了解について」『社会と調査』No.6, pp.50-56,査読有 2011 年
5）三井さよ「決定と介入の割り切れなさー多摩地域での知的障害者への支援から」『現代社会学理論研究』No.5, pp. 3-15,査読有 2011 年
6）伊藤智樹「英雄になりきれぬままに――パーキンソン病を生きる物語と、いまだそこにある苦しみについて」『社会学評論』第 241 号, pp. 52-68,査読有 2010 年
7）荒井浩道「ナラティヴ・ソーシャルワークにおける『回復』のポリティクス―認知症介護家族への支援を中心に」駒澤大学文学部社会学科『駒澤社会学研究』42, 13-30. 査読なし 2010 年
(http://wwwelib.komazawa-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/U_CHARSET.utf-8/XC01020040/Body/rsk042-03.html)
（8）井口高志「支援・ケアの社会学と家族研究―ケアの「社会化」をめぐる研究を中心に」『家族社会学研究』22-2, pp. 165-176 、査読なし、2010 年
9）井口高志「高齢者関連政策の動向―介護政策を中心に」『保健医療社会学論集』21-1,pp. 17-24,査読なし 2010 年
10）三井さよ「生活をまわす／生活を拡げる――知的障害当事者の自立生活への支援から」『福祉社会学論集』No.7, pp.118-139,査読有,2010 年
11）井口高志「認知症とされる人と生きる家族介護者――社会学の立場から」日本看護協会出版部、『家族看護』7-1,pp.16-21、査読なし 2009 年
12）Haruo SAKIYAMA“When Emotional Labour becomes to ‘good’ The usage of emotional intelligence ”
International Journal of Work, Organization and Emotion,3-2,pp.174-185 査読有り 2009 年
13）佐藤恵「障害者自立支援法の下での『支え合い』」『福祉社会学研究』、査読有、第 5 巻,pp.104-124,2008 年
14）崎山治男「感情労働と組織」(『組織科学』組織学会,41-4,pp.39-48 査読有、2008 年
15）三井さよ「「思い」を介した協働――特養 A における介護職と看護職のかかわりを通して」『ソシオロジ』162,pp.91-108, 査読有 2008 年
16）佐藤恵「障害者支援ボランティア／ＮＰＯにとっての『聴く』こと」、『地域社会学会年報』、査読有、第 19 巻、pp.131-147,2007 年
17）崎山治男「感情社会学という暴力－生きられた感情経験をめぐって」『立命館大学産業社会論集』43-3,pp.25-39,査読なし、2007 年

〔学会発表〕（計 26 件）
1）伊藤智樹「生命の危機と社会での居場所：神経難病における希望と困難性」富山大学東アジア「共生」学創成（「障害との共生」グループ）ワークショップ「障害との共生に向けたブレイクスルーの模索」(2011 年 2 月 22 日、富山大学)
2）荒井浩道「当事者に寄り添う専門性―ソーシャルワークとしての認知症介護家族支援を手がかりに（シンポジウムⅢ―認知症ケア専門士の地域での役割と今後の課題)」日本認知症ケア学会『日本認知症ケア学会誌―第 11 回日本認知症ケア学会プログラム・要旨集』9(2), 195.（2010 年 10 月 24 日，神戸国際展示場）
3）井口高志「研究倫理と向かい合うことから社会学研究を問い直す―認知症ケアに関する調査経験から」保健医療社会学会第 203 回関西定例研究会,（2010 年 10 月 3 日神戸学生青年センター）.
4）伊藤智樹「患者会への社会学的アプローチ――リハビリジムの物語」平成 22 年度地域リハビリテーション従事者専門研修会,（2010 年 7 月 23 日富山県総合福祉会館）
5）荒井浩道「わが国のソーシャルワーク実践におけるナラティヴ・アプローチの可能性―認知症介護家族への支援を中心に」日本家族研究・家族療法学会『家族療法研究（第 27 回日本家族研究・家族療法学会大会抄録集)』27(1), 47.（2010 年 6 月 4 日，ビッグパレットふくしま）
6）伊藤智樹「ＡＬＳへのナラティヴ・アプローチ：ある診察場面における医師と患者の会話を中心に」上智大学総合人間科学部主催公開研究会「『総合人間科学』構築に向けた人間の尊厳と発達にかんする学際的研究」（2009 年 10 月 23 日，上智大学四谷キャンパス）
7）佐藤恵「犯罪被害者支援の市民活動」、第 36 回日本犯罪社会学会大会（2009 年 10 月 17 日、北九州市立大学）
8）崎山治男「仏教ホスピスの可能性と限界」

日本社会学会第 82 回大会、(2009 年 10 月 12 日、立教大学)
9) 荒井浩道「ナラティヴ・アプローチにおける『書き換え』の技法 ―『ナラティヴ・ソーシャルワー ク』の可能性」日本社会福祉学会『日本社会福祉学会第 57 回全国大会報告要旨集』, 258-259. (法政大学多摩キャンパス, 2009 年 10 月 11 日)
10) 井口高志「支援・ケアの社会学と家族研究.」第 19 回日本家族社会学会大会・学会化 20 周年記念テーマセッション, (2009 年 9 月 13 日, 奈良女子大学)
11) 井口高志「「同意を得る」とはどういうことか？―認知症とされる人・介護家族・専門職への聞き取り調査を事例に」第 7 回福祉社会学会大会, (2009 年 6 月 6 日、日本福祉大学)
12) Haruo SAKIYAMA et.al:An experience of Buddhism based palliative care 1:How nurses see the role of Bonze at Vihara Unit? European Association of Palliative Care、第 11 回大会(2009 年 5 月 7 日、ウィーン市)
13) Haruo SAKIYAMA et.al : An experience of Buddhism based palliative care 2 : How Buddhism priest see their Role in CPU?、European Association of Palliative Care、第 11 回大会(2009 年 5 月 8 日、ウィーン市)
14) Haruo SAKIYAMA et.al:An Experience of Buddhism based Palliative Care3: Reconsidering the Social Consciousness of Religion 、 European Association of Palliative Care、第 11 回大会(2009 年 5 月 8 日、ウィーン市)
15) 伊藤智樹「『リハビリジム』のエスノグラフィー」日本社会学会第 81 回大会一般研究報告, 2008 年 11 月 23 日、東北大学).
16) 井口高志「認知症ケアにおける＜医療＞の論理――若年および軽・中度の認知症とされる人を対象としたデイサービスの事例から」第 81 回 日本社会学会大会,2008 年 11 月 23 日、日本社会学会
17) 荒井浩道「拒否的／消極的利用者への支援―ソーシャルワークにおけるナラティヴ・アプローチによる介入」日本生命倫理学会『日本生命倫理学会第 20 回年次大会プログラム・予稿集』, 97. (2008 年 11 月 30 日, 九州大学医学部百年講堂)
18) 佐藤恵「犯罪被害者支援への社会学的接近」、第 35 回日本犯罪社会学会大会 (2008 年 10 月 19 日、専修大学)
19)伊藤智樹「病いの物語と患者会 (セルフヘルプ・グループ)」平成 20 年度地域リハビリテーション従事者専門研修会 (2008 年 10 月 31 日　富山県総合福祉会館)
20) 伊藤智樹「病いの語り (illness narrative) 研究とセルフヘルプ・グループ――全国パーキンソン病友の会富山県支部との出会いを通して考える――」全国難病相談支援センター研究会第 9 回研究大会　特別講演 (2007 年 10 月 27 日　富山県民共生センター)
21)伊藤智樹「どのようなパーキンソン病の物語が可能なのか」日本社会学会第 80 回大会(関東学院大学, 2007 年 11 月 17 日)
22) 崎山治男「心理主義化と社会批判の可能性」日本社会学会第 80 回大会(2007 年 11 月 17 日、関東学院大学)
23)荒井浩道「ナラティブ・アプローチのソーシャルワークにおける／としての固有性」日本社会福祉学会『第 55 回日本社会福祉学会大会報告要旨集』,128.(2007 年 9 月 27 日, 大阪市立大学杉本キャンパス)
24)荒井浩道「ソーシャルワークの専門性とナラティブ・アプローチ」日本社会福祉実践理論学会『第 24 回日本社会福祉実践理論学会大会プログラム』,72.(2007 年 6 月 24 日, 大妻女子大学)
25)佐藤恵「障害者自立支援法の下での『支え合い』」、第 5 回福祉社会学会大会 (2007 年 6 月 23 日、東京学芸大学)
26)荒井浩道「地域包括支援センターにおけるナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワークの実践」日本社会福祉士学会『第 15 回日本社会福祉士学会大会プログラム』, 80-81. (2007 年 6 月 2 日, 伊勢志摩ロイヤルホテル)

〔図書〕(計　17 件)
1)佐藤恵『自立と支援の社会学―阪神大震災とボランティア』東信堂、総 218 頁,2010 年
2)崎山治男「感情を社会学的に考える」『社会学のつばさ』(編者早坂裕子、広井良典、天田城介) ミネルヴァ書房,pp.165-182,2010 年
3)荒井浩道「大衆長寿時代の家族の行方」濱口晴彦編『大衆長寿社会を生きる知恵 (シリーズ 1)』日本高齢者生活協働組合連合会, pp.37-48. 2010 年
4)荒井浩道「利用者・家族・そして支援者の介護」濱口晴彦編『大衆長寿社会を生きる知恵 (シリーズ 2)』日本高齢者生活協働組合連合会, pp.31-48. 2010 年
5)井口高志「認知症をめぐる排除と包摂――老い衰えとどう生きるか」藤村正之編『福祉・医療における排除の多層性 (差別と排除の〔いま〕4)』明石書店,pp.85-122,2010 年
6)三井さよ『看護とケア――心揺り動かされる仕事とは』角川学芸出版,総 190 頁,2010 年
7)三井さよ「ケア労働における組織――今後のあり方を考える」佐藤俊樹編『自由への問い６　労働と自由』岩波書店,pp.196-217, 2010 年

8)荒井浩道「自立と共生―年齢を超えて」濱口晴彦編『自立と共生の社会学―それでも生きる理由』学文社, 58-79. 2009 年
9)伊藤智樹『セルフヘルプ・グループの自己物語論――アルコホリズムと死別体験を例に』ハーベスト社, 2009 年
10)崎山治男「感情の用法・感情による用法：感情労働概念の再構築に向けて」安部彰・有馬斉編『生存学研究センター報告 8：ケアと感情労働－異なる学知の交流から考える』生活書院,pp.145-163、2009 年
11)崎山治男「社会問題と福祉」(友枝敏雄編『新社会福祉士養成・社会理論と社会システム』中央法規出版,2009 年 2 月,pp.191-203)
12)井口高志 2008「人間性」の発見という希望と隘路―認知症とされる人を介護する家族の経験を問うことから」上野千鶴子他編『ケア４家族のケア、家族へのケア』岩波書店 pp. 93-112.,2008 年
13)井口高志「ケアの現場―「相互行為」を見出す社会学」武川正吾・西平直編 『死生学 3 ライフサイクルと死』東京大学出版会 pp.45-64.2008 年
14)佐藤恵「自立支援のリアリティ―被災地障害者センターの実践から」似田貝香門編『自立支援の実践知―阪神・淡路大震災と共同・市民社会』、pp.205-248,2008 年
15)崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編,2008『＜支援＞の社会学：現場と向き合う思考』青弓社、総 236 頁,2008 年
16)崎山治男「感情の管理」井上俊・伊藤公雄編『自己・他者・関係』世界思想社、pp.190-201,2008 年
17)井口高志『認知症家族介護を生きる――新しい認知症ケア時代の臨床社会学』東信堂、総 335 頁、2007 年

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤恵（Sato Kei）
桜美林大学・法学・政治学系・准教授
研究者番号：90365057

(2)研究分担者

伊藤智樹（Ito Tomoki）
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：80312924

崎山治男（Sakiyama Haruo）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：20361553

三井さよ（Mitsui Sayo）
法政大学・社会学部・准教授
研究者番号：00386327

(3)連携研究者

荒井浩道（Arai Hiromichi）
駒澤大学・文学部・准教授
研究者番号：60350435

井口高志（Iguchi Takashi）
奈良女子大学・生活環境学部・准教授
研究者番号：40432025

水津嘉克(Suitsu Yoshikatsu)
東京学芸大学・教育学部・講師
研究者番号：40313283